

PTSD (Posttraumatic Stress Disorder)とBPD (Borderline Personality Disorder)の ロールシャッハ反応に見られるトラウマの影響

鹿 児 島 純 心 女 子 大 学 成 願 め ぐ み
鹿 児 島 純 心 女 子 大 学 大 学 院 餅 原 尚 子
鹿 児 島 純 心 女 子 大 学 大 学 院 久 留 一 郎

要旨

本研究では心的外傷（トラウマ）のパーソナリティに及ぼす影響が、ロールシャッハ反応にどのように表出するのか、その現れを探索した。研究対象としてPTSDの事例8ケース、トラウマとの関係が深いとされるBPDの事例11ケース、統制群として健康群10ケースのロールシャッハ・プロトコルを用い、名古屋大学式技法によるスコアの量的分析と、反応の質的分析を行なった。結果として、「血液反応」(BI)の多さ、Positive feeling%の少なさ、色彩優位の反応の多さ(FC<CF+C)などが、PTSD、BPD両群に共通した。また、両群ともにPTSD症状の「再体験」を思わせる反応が多く見いだされ、トラウマの再現性や影響はロールシャッハ反応上にも見いだされることがわかった。

キーワード：トラウマ ロールシャッハ反応 PTSD BPD

1. 問題と目的

心的外傷（トラウマ）とは「事件・事故・災害などを体験した際の、重い心の傷」である(久留, 2004)。それは、その出来事によって実際に安全を脅かされるか、あるいは脅かされるかもしれないという恐怖体験が、それに対する個人の対処能力を超えたときに生じるといわれる。つまり、被った出来事の客観的事実より、「個人の主観的体験」がより重要になる(久留, 2004)。したがって、同じ外傷を被っても、その結果引き受けるトラウマは個人によって異なる。

トラウマを受けた人々には、最も直接的な症状として、いわゆるPTSD症状が出現する。外傷的体験が、想起したくないのに繰り返し思い出される「再体験」、外傷体験に関連した刺激状況に対して、意識的、無意識的に生じる「回避」症状と、恐怖感を回避するために感情全般を麻痺させてしまい、喜びや楽しさも感じられなくなる「感情の麻痺」、神経が過敏になり、些細なことに反応し、イライラして集中できなくなる「覚醒亢進」の症

状である。また、人が変わったかのような「いわれのない攻撃性」があらわれることもある(久留・餅原, 2001)。このような症状は、当事者の内面を苦しめると同時に、当事者の生活を生きにくいものとさせ、それによって、無力感や失望感が自己イメージを彩るようになる。また、自分を取り巻く環境や他者に対しては「安全でないもの」「危険なもの」「恐ろしいもの」として認知されるようになると言われる(西澤, 1999)。

このようなトラウマを子どもの頃に被った場合、さらに影響は複雑となる。長い成長過程で、トラウマが内在化し、否定的自己イメージや否定的他者イメージは強化され、外の刺激に対する過度の敏感さが生じ、普通の出来事でも過度にこのイメージが働き、「危険」の尺度が現実とそぐわなくなる。結果として、感情コントロールの困難、アイデンティティへの否定的影響、基本的信頼の障害、対人関係への過度の過敏さ、虐待的人間関係の再現といった特徴をもったパーソナリティが形成される。これらの特徴と非常によく似たBPDが、

ある種のPTSD（複雑性PTSD）であると指摘されるゆえんである。

一回性の外傷体験から生じたトラウマと長期反復性の外傷体験から生じたトラウマ、あるいは、大人になってから被ったトラウマと発達早期に遭遇したトラウマとではその後遺症は異なる。昨今、トラウマをもつ人、あるいは虐待体験を持つ人のロールシャッハ反応について研究は重ねられているが、多種多様なトラウマ体験が考えられる中、まだ研究の必要性は高いと思われる。本稿ではPTSDとBPDのロールシャッハ反応の比較を通して、ロールシャッハ反応に見られるトラウマの影響をみることを研究の目的とした。

II. 対象

PTSDを発症した事例のプロトコル8ケース（PTSD群）、BPDのプロトコル11ケース（BPD群）を分析対象とした（成願，2007）。PTSD群にはDV、rape・ストーカー等の性被害、強盗被害、いじめ、殺人現場の目撃、地震被災等の外傷体験が認められる。また、BPD群にも虐待を含め、近親者からの性被害やいじめ、暴力などの外傷的体験が本人より報告されている。比較統制群として日常生活を適応的に送っている人のプロトコル10ケースをNormal群（N群）とした。3群の平均年齢および平均就学年数は、PTSD群：27.8歳，12.7年，BPD群：25.4歳，11.7年，N群：25.5歳，13.2年である。平均年齢と平均就学年数について3群の間に有意差はみられなかった。

III. 方法

PTSD群とBPD群のロールシャッハ反応について、量的分析および質的分析を行ない、両群の反応の異同について考察した。スコアリングおよび分析にあたっては名古屋大学式技法（以下、名大法）に準拠した。

量的分析においては、すべての変数のスコアについて、両群とN群との量的比較、またPTSD群とBPD群との量的比較を行なった。比較に当たっては、Mann-WhitneyのU検定を用いた。なお、

各事例の総反応数の違いによる影響を考慮し、「反応領域」「決定要因」「反応内容」については、各変数のスコアを総反応数で割り、反応の出現率を求め、それを分析対象とした。また、感情カテゴリーにおいては各スコアをTotal Affectで割り、同様の手続きを行なった。その他の変数についてはスコアをそのまま用いた。

質的分析では、感情カテゴリーの下位カテゴリーを中心に情緒的側面を、また、H反応とM反応を中心に対人関係の側面を分析した。さらに、PTSDの主要3症状（「再体験」「回避と感情の麻痺」「覚醒亢進（神経過敏）」）に視点を当て、自由反応および質疑段階での反応から、それぞれの症状を示すと思われる反応を3名（内、PTSD臨床を専門にしている臨床心理士2名）の合評で抽出した。ただし、本稿ではそのうち、PTSD症状に最も特徴的な「再体験」の反応のみを扱う。この他、抽出された反応とイメージカードおよび思考・言語カテゴリーとの関連性についても検討を行なった。

III. 結果と考察

1. ロールシャッハ変数の量的比較

（1）検定の結果

PTSD群とN群、BPD群とN群、PTSD群とBPD群、それぞれの比較を通して、1%水準もしくは5%水準で統計的に有意な差がみられた変数をTable1～3にまとめた。

Table 1 PTSD群とN群における量的差異

	順位和		U値
	PTSD群	N群	
・付加反応	99.50	71.50	16.500*
・平凡反応	100.50	70.50	15.500*
[決定要因]			
・FT	53.00	118.00	17.000*
・FC<CF+C	48.00	123.00	12.000*
[反応内容]			
・A／	53.50	117.50	17.500*
・Bl	101.50	69.50	14.500*
・Orn	52.00	119.00	16.000*

[感情カテゴリー]			
・Prec	51.00	120.00	15.000*
・Pnat	48.00	123.00	12.000*
・Porn	52.00	119.00	16.000*
・Positive feeling%	45.00	126.00	9.000**

注) $p < 0.05$ * $p < 0.01$ **

Table 1より, 「付加反応」, 「平凡反応」, Bl (血液反応), $FC < CF + C$ において, PTSD群はN群より有意に多かった。

また, FT, Strange A (A/), Orn (装飾反応), および快的感情におけるPrec (娯楽反応), Pnat (自然美反応), Porn (装飾反応), Positive feeling% (快的感情%) において, PTSD群はN群より有意に少なかった。

Table 2 BPD群とN群における量的差異

	順位和		U値
	BPD群	N群	
・Tot. R	85.00	146.00	19.000*
・T/ch	92.00	139.00	26.000*
・R+	81.50	149.00	15.500**
[決定要因]			
・FC'	92.50	138.50	26.500*
・CF	155.50	75.50	20.500*
・色彩反応の総数	156.50	74.50	19.500*
・ $FC < CF + C$	83.50	147.50	17.500**
[反応内容]			
・Bl	150.00	81.00	26.000*
・Anatomy 反応	151.00	80.00	25.000*
[感情カテゴリー]			
・Hdpr	152.00	79.00	24.000*
・Porn	92.00	139.00	26.000*
・Positive feeling%	89.00	142.00	23.000*

注) $p < 0.05$ * $p < 0.01$ **

Table 2より, BPD群とN群の比較においては, CF, $FC < CF + C$, 色彩反応の総数, Bl (血液反応), Anatomy反応および感情カテゴリーのHdpr (蔑視反応) において, BPD群がN群より有意に多かった。

一方, Tot.R, 色彩カードにおける初発反応時

間 (T/ch), R+, FC', 感情カテゴリーのPorn, Positive feeling%において, BPD群はN群より有意に少なかった。

Table 3 PTSD群とBPD群における量的差異

	順位和		U値
	PTSD群	BPD群	
[決定要因]			
・色彩反応の総数	54.00	136.00	18.000*
[感情カテゴリー]			
・Pnat	53.00	137.00	17.000*

注) $p < 0.05$ * $p < 0.01$ **

Table 3より, PTSD群とBPD群の間では有意差はほとんどみられなかったが, 色彩反応の総数と感情カテゴリーのPnatがBPD群に有意に多かった。

以上, Table1~Table3の結果より, PTSD群とBPD群は共通して, Bl (血液反応) がN群より多く産出され, また, Porn (装飾反応), Positive Feeling% (快的感情%) が共通してN群より少なかった。しかし, PTSD群とBPD群との間には差はみられなかった。

(2) 量的分析による情緒面の考察

今回の検定の結果では情緒面を示すいくつかの変数に有意差がみられた。以下に, 詳細に検討してみたい。

①血液反応

名大法の解釈では, 「血液反応」(Bl) は特に「攻撃性・加虐性・破壊的衝動などを意味するが, これらの衝動や欲求が実行されないままに, 鬱積している場合に示されることが多い」とされる。このスコアの多さは, PTSD群およびBPD群に共通して攻撃的, 加虐的衝動が高いことを意味し, 単純性PTSD, 複雑性PTSDおよびBPDに共通する「怒りの爆発」や「衝動制御の困難」などの症状と一致する。また, 「血液反応の多さ」は特に性的虐待を受けた複雑性PTSDに頻出するといわれ(香田, 1997, 田澤, 1999), また, 虐待経験をもつBPDにも特徴的な反応とも言われる

(Saunders, 1991)。今回の結果とも併せ、トラウマとかかわりが色濃い反応であると思われる。さらに、これらの先行研究では、「血液反応」とともに、「解剖反応」「性反応」が併出すると言われているが、本研究でも「解剖反応」(Anatomy 反応)はBPD群に多く、また性的虐待既往のBPDやrape被害を被ったPTSDには2個以上の「性反応」が産出されている。これらの反応も、トラウマとの関わりのニュアンスを感じさせるが、この結果だけではトラウマとの結びつきについて確かなことは言えない。

②少ないPositive feeling%

また、これまでの研究ではPTSD事例においてTot. Unpleasant feeling%やAnxiety %の高さが特徴として取り上げられていたが(久留・餅原, 1996; 餅原・久留, 2001), 今回の結果では, Anxiety%やTot. Unpleasant feeling%はN群でも高めであり, PTSD群にもBPD群にも有意差は示されなかった。これは、今回の事例の特徴とも、あるいは日常生活を適応的に送っているN群といえども、日常生活のストレスや疲労から不安感や不快感情が出現するものとも十分推察される。

一方、Positive feeling%はPTSD群とBPD群に共通してN群より有意に低いことが明らかになった。この結果については、PTSD群においては、PTSD症状の1つである「感情の範囲の縮小」として生ずる「アンヘドニア」に通じるものが考えられる。また、BPD群においては、DSM-IV-TR (2003)の診断基準の一つである「慢性的な空虚感」と一致するものであり、さらには、これまでしばしば「うつ病」との関連性が指摘されてきたBPD(Gunderson, 2006)のうつ病症状の1つである「喜びの減退」が考えられる。

しかし、個々に事例をみれば、PTSD群やBPD群の中には、Total Unpleasant feeling%は高くなく、Positive feeling%も適度にみられるケースもあり(例えばrapeによりPTSDを発症した事例ではTotal Unpleasant feeling%=50%, Anxiety %=25%, Positive feeling%=28%であった), Positive feeling%は高くてもひどいト

ラウマ体験をしている場合もあるということは念頭に置くべきものと思われる。しかし、Unpleasant feeling%が高くPositive feeling%が低い場合は、なんらかの「不適応」が起きていると見なすのが一般的であり(土屋ら, 1999), 今回の研究ではそれが、PTSD群とBPD群に共通した特徴として見られることから、直接的にトラウマを示すものとは言えないまでも、トラウマによる影響の1つの表れと考えられるのではないだろうか。

③感情統制

PTSD群とBPD群に共通な特徴として、感情統制の低下を示す色彩優位の反応の多さ(FC<CF+C)にN群との有意な差がみられ、両群の情緒刺激に対する耐性の弱さが顕著な形で示された。

色彩反応について、田澤(1999)は、形態と色彩の異なる位相を結びつけるという作業において葛藤が生じ、その葛藤をどのように乗り越えるかで色彩反応のあり方が決定されると述べている。葛藤を乗り越えて、形態に色彩を適当に取り入れ、統合的に反応をつくりだす(FC)か、あるいは葛藤を回避するために形態か色彩を無視して反応を産出するか(CF, CもしくはF)どちらかになる。FCを産出するには、葛藤に対する耐性が必要になるが、PTSD群およびBPD群は共通して、葛藤を回避し、形態を無視する反応に偏り、色彩刺激に圧倒されている内面がうかがわれた。この極端な形のカラーショックも両群に多くみられた。

言い換えると、このような反応の中に、「自己を圧倒するような恐ろしい体験」に晒され、一時的に耐性が弱まっているPTSD群や、内在化したトラウマのために、日常の小さな刺激でも「圧倒的な感情の波に押し流される」状態になる(西澤, 1997)慢性的な耐性の弱さをもつBPD群の内面が映し出されているとも言えよう。

④PTSD群とBPD群の群固有の特徴

BPD群はN群に比べ、色彩カードの初発反応時間(T/ch)が早く、CFおよび色彩反応の総数が多く、R+が少ないことにおいて、有意差が見られた(Table 2)。また、PTSD群との比較におい

ては色彩反応の総数およびPnatに有意差がみられた (Table 3)。T/chの早さとCFおよび色彩反応の総数の多さは、情緒刺激に非常に敏感で、動かされやすいことを意味する。加えて、F+に有意差がみられず、R+にのみ有意差がみられたことを考えると、色彩刺激と結びついた反応に形態水準の崩れが生じたものと考えられる。実際、フルカラーカードで形態水準が崩れるケースが少なからず見られ、強い情緒刺激に晒されると、防衛手段も持たずに、情緒刺激に容易く動かされ、圧倒され、自我状態が崩れてしまう姿がうかがわれる。

PTSD群の特徴としては (Table 1)、平凡反応が適量に産出されている (3~6個) ことがあげられる。PTSD群は社会的な協調性とともにも他の人々と同じように世界を見ることができると判断できる。しかし、ほとんどのケースに付加反応 (Add.) があること (N群では1ケースにのみ見られたが、PTSD群は8ケース中7ケースに産出された)、Card of Rejectionが5割のケースにみられること (N群には皆無)、8割のケースにCard Turningがないことなどから、PTSD群の強い防衛の姿勢がうかがわれる。しかしながら、恐怖体験を被った人にとって防衛的になるのは、ある意味、自然な、健康的な反応であるともいえる。強い情緒刺激に晒されながら必至で防衛する姿がPTSD群の特徴としてとらえられる。

2. 感情カテゴリーを中心とした分析

(1) Unpleasant feelingにおけるAnxiety feeling

PTSD群とBPD群の感情世界はUnpleasant feeling (不快な感情) が大半を占め、Total Unpleasant feeling%はBPD群では60%前後 (11ケース中6ケースが60%以上)、PTSD群では60%から70% (8ケース中6ケースが65%以上、その内3ケースは70%以上) の高い割合を示した。

このように高いTotal Unpleasant feeling%の中で、特に高い割合を示したAnxiety (不安感情) の内容は、両群ともAthr (脅威反応)、Agl (陰

鬱反応)、Adis (嫌悪反応) が際立っていた。一方で、PTSD群は、よりAthrが中心となっており、BPD群ではどちらかというとAdisやAglの方が色合いが強く、両群に若干異なる特徴が見られた。Adisは嫌悪感を表すカテゴリーであると同時に、ときに脅威感情の現われを示すカテゴリーであり、脅威感情がより直接的に認知されるPTSD群に比べて、BPD群は脅威感情が生理的な感情として認知されているものと推察される。

(2) Hostility feeling

また、トラウマを受けた人は、他者あるいは環境に対して、過度の警戒と攻撃性をもつといわれるが (西澤, 1999)、本研究ではHostility (攻撃感情) について、3群間での有意差は見られなかった。しかし、特に際立った特徴とはいえないが、PTSD群とBPD群には、30%近い高いHostility%を示す事例が3事例ずつあり、特にPTSD群では30%を越えるものも2事例あった (N群では最高が20.6%であった) ことは注意すべきことと思われる。

Hostilityの質的なありようとしては、両群にHH (直接敵意反応) とHh (間接敵意反応) が事例全体にみられる。また、産出されるのは稀といわれるHhad (欠損反応) が、それぞれの群に4事例ずつみられた。このスコアは男性では去勢不安を示し、女性では身体に対する不満感をしめすものであるが、その反応は「(足が) 切れている」「足がない」「(枯葉に) 穴があいている」「(羽が) 破れている」「(ふちが) ちぎれている」などであった。長い間、父親から性的虐待を受けていた女性の事例では「アスファルトに穴があいている」と反応している。通常なら穴があくはずのない固いアスファルトに空けられた穴は、それ自体固く固定されたもののような印象を受けた。

このような共通性的一方でPTSD群の特徴としてはHh (間接敵意反応) が特に多かった。また、Hostilityが特に高い2事例では、共通して、「抑圧された敵意のある攻撃的感情」を示すHhat (緊張反応) が非常に多くみられた。

一方、PTSD群にはあまり見られないが、BPD群に特徴的に見られたものは、より直接的な敵意表現を示すHH（直接敵意反応）、退行的な口腔加虐的な特徴を示すHor（口腔攻撃反応）、そして、N群との有意差がみられたHdpr（蔑視反応）である。Hdprは「間接的な敵意をほのめかす人間の蔑視」を意味する。より直接的で、退行的な攻撃性、そして敵意を人に対する蔑視という形で間接的に表す方法が用いられるところに、BPDのトラウマがより発達早期の、対人的なものであることが示唆される。

3. 人間反応の分析

ロールシャッハ法の「人間反応」は、一般に、他者に対する関心や感受性を反映し、他者を受容し、共感する能力を示すものとされる。また、人間反応の中でも特に人間運動反応（M反応）は「ストレス状態にあるとき、彼自身の中に避難し、統制し得ない衝動性を、回避することができるようにする内的な手段」（片口、1974）でもある。したがって、人間反応の量や質的な有りようは、トラウマを抱える人の他者に対する感受性や対人認知をであり、内的支えの質を示すものと言える。

本研究対象のPTSD群とBPD群の「人間反応」（Human反応、Hd反応、Strange Human反応、Strange Hd反応）について特に量的な特徴はみられなかったが、個々の事例をみると、H反応やM反応が非常に多い（H%が5割～8割）対人過敏的な事例と非常に少ない（H=1, M=1）対人回避的なものと、事例によって幅がみられた。この内、対人過敏を示したものは恋人からのDV被害、ストーカー被害、rape被害、児童期性虐待既往など、直接的に人的被害を受けた事例である。以下に「人間反応」に表れた対人関係のありようについて、両群の特徴を述べる。

（1）Negativeな対人認知

PTSD群はすべての事例で、いわゆる「人間カード」と呼ばれるカードⅢに平凡反応を産出し、普

通の健康的な人間像を知覚している。まれに、人間像が非常に不明瞭なもの（例えば「ぼんやりした人の形」）もみられるが、概して、基本的な人間像が確立している。しかし、その人間像には「足が切れて」など、傷つき、苦勞している姿や、「悪魔の顔」「不気味な笑い」「ゆがんだ顔」「苦しんでいる目」「目が怖い」等の顔反応やeye反応には他者の視線や思惑への緊張や警戒や恐れが見られる。また、このようなNegativeな対人認知はBPD群にも共通しており、「悲鳴を上げている」「怖い人が運んでいる」「顔から血をだしている」「マントがやぶれている」「鉄の塊をもっている」「死んでいる（血まみれ）」など、悲痛さや恐怖心すら感じさせる反応が見られた。

両群の内面にある自己イメージあるいは他者イメージが痛々しい一面を備えていることが窺われた。

（2）Strange Human反応（H/、Hd/）

Strange Human反応は対人関係への感受性を反映すると同時に「現実の対人関係を避け、空想的な世界に逃避する傾向」（片口、1974）をも意味すると言われる。

この反応において出現した人間像は両群の間でやや異なる印象を与えた。PTSD群のStrange Human反応には「お化け」「悪魔」など、“normal strangeness”ともいえる一般的なイメージがみられた。これらはN群にも見られる反応であった。一方、BPD群の場合は「魔女」「宇宙人」「妖怪」「鳥人」「悪魔の影」等、種類も豊かで、より“fantastic strangeness”の印象を与える。

外傷的環境の中に、幼い頃から過ごし、何度も避難所として逃げ込んでくるうちに、空想の世界がより豊かになったと見ることもできるが、あるいは、対象の内在化のために必要な、信頼で結ばれた現実の他者の存在が希薄であったため、代わりに空想の中の他者を取り入れたともみることができる反応である。その意味において、この“strangeness”は、BPD群の中に基本的な対人信頼のトラウマのニュアンスを感じさせる。

4. PTSD症状を視点とした分析

BPD群、PTSD群、N群のそれぞれの事例のロールシャッパ反応において、PTSDの3つの主症状、「再体験」「回避と感情の麻痺」「覚醒亢進（神経過敏）」に視点をあてて分析を試みた結果、各事例において、トラウマの存在を彷彿とさせる反応が見いだされた。先述したように本研究では「再体験」に視点を充てて考察する。

（1）「再体験」を示す反応

PTSD群とBPD群における「再体験」反応には、概して情動を伴ったnegativeな場面の想起がみられた。

PTSD群では、すべての事例ではそれぞれの外傷体験を思わせる反応が見られた。それらの反応では、体験された外傷的出来事を思わせる内容が強い情動をもって語られている。たとえば、強盗被害を受けた事例ではカードIVに「黒とグレーが目の前にあって」と語りながら、「あの時の壁」を知覚し、「威圧感」「動けない」との情動が表出された。また、深夜、暗闇の中で繰り返されたいじめの体験をもつ事例では、5枚のカードの反応で「暗闇」を指摘している（「ロケット（暗闇に向かって飛んでいる）」「コウモリ（暗い所にとまっている）」）。黒色の形に、コウモリの姿を認めつつも、その色はコウモリそのものではなく「コウモリをとり巻く周囲の闇」に投影されていた。

BPD群では、父親や近しい男性から幼児期または児童期に性的虐待の体験がある3事例で、男性や父親を投影しやすいカードIVに「邪なもの」、「見下ろしている（怪獣）」「すごい偉そうな」「獰猛な」存在が想起されている。質疑段階では「見下ろされているなあ。見られてる。」と臨場感を伴う反応もみられた。

胎内の子どもを失った経験をもつ3事例では、その出来事が直接的な「再体験」反応となって想起されたのは1事例だけであった（「私の子宮」「子供が死んでいる」）。この事例が他の2事例と異なる点は、他の2事例が中絶によって胎児を喪失しているのに対し（そこには多少とも本人の意

志が働いていると思われる）、この事例の場合は、他者からの暴力によって流産が生じている。当事者のまったく意志のおよばないことであった。PTSDの症状の重篤さは自分の意志によって行動制御できるか否かによる（久留・餅原，2001）といわれるが、自分の意志がおよばなかったこの事例では、胎児の喪失は深いトラウマとなったと推察される。

また、母親との確執がある事例では、2枚のカードに渡って、直接的に母親と祖母との関係が想起されている。カードVIで「お母さんのお母さん」としての「おばあちゃん」が「好きだけど嫌い」な人として想起され、続くカードVIIでは「私とお母さん」「心はそむきあっている」と反応している。Piotrowsky（1980）によれば「Mによって示される人格特性は、早期児童期に形成され」、この原型については両親との関係が影響しているといわれるが、BPD群においては、このような外傷的な人間関係を示唆する反応が、他の事例でもみられた（「心は背きあっている」「邪魔される」「引き剥がされそう」など）。

N群は特にトラウマ的な出来事は体験していない人たちのプロトコルであるが、N群でも「再体験」を思わせる反応がみられた。1つはカードIXの色彩に反応して「病気」（Csym）と、象徴的な反応がみられた。このケースでは本テストの1年ほど前にストレスで体調を壊したことがあったことが、後になってわかった。また、事件性を感じさせる非常に高いところからの「飛び降り自殺（20階から落ちた）」との反応がみられた。そのような場面を見る体験があったかどうかはわからないが、この反応において、特に情動的な表現はなく、形態水準もよかったことを述べておく。

（2）イメージカードとの関係

このような「再体験」反応を示したカードは、PTSD群BPD群の多くの事例でMost Disliked Card（MDC）として選ばれた。BPD群では、対人関係を含めた外傷的体験を思わせる反応がみられ、それらも往々にしてMost Disliked Cardに

選択されていた。また、自由反応段階や質疑段階でははっきりしなかった反応が、MDCを選ぶ段階ではっきりと思い出される事例もみられた。

また、BPD群には特に両親のイメージカードがMDCと重なる事例や、Father Image CardやMother Image Cardに選ばれたカードの反応に被害的場面や、邪魔をするもの、喧嘩するものが見られるなど、対人関係のトラウマが直接的、間接的に表現されるものもあった。

(3) 思考・言語カテゴリーとの関係

トラウマの再現性については、名大法に特有の思考・言語カテゴリーとも関連している。PTSD群とBPD群に共通して多くみられたものはFabulization ResponseとPersonal Responseの出現であった。特に、Fabulization ResponseについてはPTSD群のほとんどの事例に強い感情を示すaffective elaborationがみられ、そのいくつかには外傷的出来事の想起がみられた。これはBPD群にもみられるが、BPD群の場合はoverelaborationなどの作話機能が強い表現の方が特徴的である。また、被害的な内容の反応には作話機能は強く働く傾向があるようである。Personal Responseは個人的経験と現実吟味の在りようが問題となるカテゴリーであるが、自己関連付けの強い反応や、自分の体験にまつわる内容におよび、本人も忘れていた過去の出来事が思い出されることもあった。

以上から、イメージカードや思考・言語カテゴリーも、トラウマに近づく1つの視点と思われる。

IV. 結語と今後の展望

本研究ではトラウマを被った人々のロールシャッハ反応に、それを示す何らかの標があるものとの視点に立ち、PTSDとBPDの反応を分析し、考察した。その結果、いくつかの視点が見えてきた。色彩反応と感情カテゴリーからみえた感情統制の問題、高いUnpleasant feeling%と低いPositive feeling%、恐怖や嫌悪、陰うつさが色濃い感情のありよう、血液反応や内臓反応の多さ、人間反応におけるNegativeな明細化、そして、トラウマ

の「再体験」を思わせる反応内容などである。

この分析の過程で、トラウマを持った人々の痛む内面に触れる事が多かったが、同時に、その中でなんとか生きようとする姿や保たれている基本的な健康さなども感じることができた。そして、そこにかすかな希望を感じた。今回の分析で、トラウマを持った人とそうでない人との相違がPositive feeling%の低さにあると見いだしたことは、筆者にとって1つの示唆となっている。これらの人々がトラウマを抱えながらも、これまで日常生活を送ってこられたのは、心のどこかにPositive feelingがあったからではないだろうか。それは、彼らのこれまでの生活の中で、何らかの“Happy Events”があったことを意味し、また、これからも起こりうることを示唆する。「Happy and Positive Life EventsはPTSDのケアのために重要な役割を果たす」(久留, 2004)と言われる。今後の人生の中で、“Happy Events”の体験が重なり、彼らの内面のPositive feelingが増え、トラウマの癒しへと向かうことを希望してやまない。

付記：本稿は筆者の修士論文(成願, 2007)の一部を再分析したものである。

引用・参考文献

- Gunderson, J.G. (2001): 黒田章史訳 (2006): 境界性パーソナリティ障害—臨床ガイド— 金剛出版
 久留一郎, 餅原尚子 (1996): 極度のいじめを機に発症した外傷後ストレス障害(PTSD)—ロールシャッハ・テストを通しての心理治療の課程— ロールシャッハ研究, 38, 127-148.
 久留一郎 (2004): PTSD—ポスト・トラウマティック・カウンセリング— 駿河台出版社
 成願めぐみ (2007): 境界性パーソナリティ障害のロールシャッハ反応に関する臨床心理学的研究—トラウマの軌跡を探る— 鹿児島純心女子大学大学院修士論文
 片口安史 (1987): 改訂新・心理診断法—ロールシャッハ・テストの解説と研究— 金子書房
 香田絵美子 (1997): ロールシャッハ法にみられるPTSD—ロールシャッハ研究, 39, 61-72.
 餅原尚子, 久留一郎 (2001): 性的虐待(レイプ, セクハラ・ストーカー)によりPTSD症状を呈した2症例のロールシャッハ反応— ロールシャッハ研究, 5, 53-66.
 西澤哲 (1999): トラウマの臨床心理学 金剛出版
 Piotrowsky, Z.A. (1957): 上芝功博訳(1980): 知覚分析—ロールシャッハ法の体系的展開— 新曜社.
 Saunders, E.A. (1991): Rorschach Indicators of Chronic Childhood Sexual Abuse in Female Borderline Inpatients. Bull Menninger Clin, 55, 48-71
 田澤安弘 (1999): ロールシャッハ・テストからみた外傷体験の後遺症について— アディクションと家族, (3), 386-404.
 土川隆文他編 (1999): ロールシャッハ法解説—名古屋大学式技法— 名古屋ロールシャッハ研究会

Abstract

The Common Elements Seen through the Rorschach Protocols of Traumatic Cases with Regard to Posttraumatic Stress Disorder and Borderline Personality Disorder

This research is to investigate quantitatively and qualitatively how trauma effects the Rorschach responses of a group of people with Posttraumatic Stress Disorder and those with Borderline Personality Disorder who had traumatic experiences, applying Nagoya University Method.

We made a quantitative comparison between Rorschach protocols of the following groups. Firstly between PTSD group (n=8) and control group (N=10), secondly BPD group (n=11) and control group, and lastly PTSD group and BPD group. The significant differences seen commonly in the Rorschach responses of the BPD group and those of the PTSD group were following: (a) high frequency of 'blood' response, (b) low Positive feeling%, (c) a predominance of color-dominated (CF and C) over form-dominated color (FC) responses.

Through qualitative investigation, common characteristics were seen in subdivision of Affective Symbolism. Both high Anxiety feelings of PTSD and BPD were consisted of 'threatening percepts', 'disgusting percepts', and 'depressive gloomy percepts'. The elements commonly seen in the BPD group and those seen in the PTSD group reflected the difference of traumatic experiences both groups went through. Moreover, the responses indicating "reexperiencing of the traumatic event" which is one of the main symptoms of PTSD were seen in many cases of both PTSD and BPD.

These results seem to suggest that trauma can influence Rorschach responses in the ways shown above.

KeyWords : trauma, Rorschach responses, PTSD, BPD